

高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会

第4回 現代龍馬学会

「志(こころざし)に生きる」

～4年目に向かって、目標と課題～



会長 片岡 雅文

高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会の第4回総会と研究発表会が5月12日、国民宿舎「桂浜荘」で開かれた。

2009年に学会が発足してから3年余り。初めに会員の出席による総会で、この1年の歩みを振り返るとともに、新しい予算や事業計画などを質疑・承認して、4年目のスタートを切った。次いで、来賓の県議会議長武石利彦さん、高知市教育長松原和広さんから祝辞をいただき、学会理事の竹内土佐郎さんが「龍馬甚句」(坂本登さん作詞)を披露。その後県内外から一般の人たちを含めて82人が参加し、「志(こころざし)に生きる」をメインテーマにした研究発表会が開催された。登壇した7人の発表は、これまでにも増して中身の濃い、充実したもので、その熱気は終了後の懇親会に引き継がれ、早くから総会と研究発表会の準備に取り組んでくださった理事や会員の方々、龍馬記念館のスタッフの皆さんに、あらためて感謝したい。

独自の知見を生かした
研究発表

研究発表は、徳島大学名誉教授の渋谷雅之さんをはじめ、大

城戸圭一さん、川崎弘佳さん、窪内隆起さん、吉井淳さん、吉岡郷継さん、亀尾美香さんの7人の方々。龍馬と樋口真吉、龍馬の脱藩と伊予、現代の視点から見た龍馬、司馬遼太郎と「龍馬がゆく」、吉井源太と龍馬精神、学会とその志……と、それぞれにテーマを掲げ、独自の知見を盛り込んだ興味深い発表が行われ、大変好評だった。来春刊行される現代龍馬学会「紀要」第4号に、その成果が収められるのを楽しみに待ちたい。

思えば、未曾有の惨事となつた東日本大震災と福島原発事

故からようやく1年。国のヴィジョンは失われ、政治や経済は危機的状況から脱け出せず、社会はますます混迷し、将来への展望が開けない。そのような時代にあって、私たちは坂本龍馬の生き方や思想に学び、現代に生きていこうと努めてきた。

それは、1人1人が「志」を

持つて生きることであり、人と人との絆を大事にして奉仕と互助の精神を持つことであり、何よりも自由や和平を守り、尊んでい

くことでもあるだろう。

龍馬にとって、海軍を興し、国

論を一つにして西欧列強の脅威

に对抗し、日本を近代的な国

家につくりかえていくのが、脱

藩して以来の宿志だった。それ

いどんなものだったのか? 同志の

溝淵広之丞に宛てて、こんなふ

うに語っている(草稿・慶応二年十一

月)。

「……数年間東西に奔走し、

屡々(しばしば)故人に遇て路人

の如くす。人誰か父母の國を思

ひざらんや。然(しかし)忍で之

(これ)を顧ざるハ、情の為に道に

乖(もどり)宿志の蹉躓(さち)を

恐るゝなり。志願果たして不就

(ならずん)バ、復(また)何為にか

君顔を挙せん。小弟長く浪遊し

て仕禄を求めず、半生勞苦辭せ

ざる所……」

(故人)故郷の人、路人(他人)

、乖り(そむく)反する、蹉躓

(挫折)

数年にわたって東奔西走し、し

ばしば土佐の人にも会つたが、他

人のようになる舞つてきた。故国

を思わないような人がどこにい

るだろう?しかし、あえてそれ

を顧みないのは、前々から心に抱

いている志が果たせなくなつてしまふのを恐れるからだ。志を果

たさずして、どうやつて君公(山

内容堂)に拝謁しえようか? 私

が長いあいだ浪々の身に甘んじ、

藩の禄を求めず、苦労を続けて

いるのはそのためなのだ……。

龍馬にとって、海軍を興し、国

龍馬にとって、「志」とはいったいどんなものだったのか? 同志の

溝淵広之丞に宛てて、こんなふ

うに語っている(草稿・慶応二年十一

月)。

この龍馬の語っている「志」の

意味、現代に置き換えると、そ

れはどういうことになるのか?

私たちはいま一度、じっくり考え

てみなければならない。

この龍馬の語っている「志」の

意味、現代に置き換えると、そ

れはどういうことになるのか?

自分自身の上のこと構つてい

られない、大義こそ何よりも大

切なものなのだと、言うのだろ

う。

論を一つにして西欧列強の脅威

に对抗し、日本を近代的な国

家につくりかえていくのが、脱

藩して以来の宿志だった。それ

を達成するには、土佐のことも

自分の身の上のことも構つてい

く。そのためには、土佐のことも構つてい

「ほれ話」 犬歩棒當記（京都出土の土佐瓦）

京都国立博物館 宮川 祯一

宮川
禎一

龍馬や幕末史研究の余録がこの短文なのだが、筆者の本職はじつは考古学である。今回は京都市左京区で地中から発掘された瓦の話をしたい。

一九九二年、京都大学の北部構内、農学部の建物建設にともなつて、大学の埋蔵文化財センターの手で地下の遺跡の発掘調査が行われた。この際、江戸時代末頃の遺物が出土したのだが、その中に土佐で生産された屋根瓦の破片が数多く出土したの

なぜ土佐の瓦と分かったのか
というと、瓦の表面に産地や工
房を表すスタンプがくつきりと
押されていたからである。

「アキ兼」「アキ文」「アキ角」「安喜寅」「赤野銀」「赤の源」「片常」「片重」「片万」「並(並)生野角」「中友」「中山林」「いおろい栄」「佐古吉」など二十三種に及んでいる。高知県の方にはおなじみの地名であろう。研究の結果現在の安芸市や香美市、香南市など高知県東部にあつた瓦工房の刻印だと判明したのだ。



（報告書は『京都大学構内遺跡調査研究年報』一九九二年度。写真もそこから引用しました）

京都の土の中から中岡慎太郎や陸援隊ゆかりの遺物が出て来

のような土佐藩の瓦が出土した理由は、お察しのとおり、慶応三年に北白川陸援隊の宿舎として利用された土佐屋敷の所在地だったからである。記録によれば慶応二年に大坂今在家村（現住之江区粉浜）にあった土佐藩の建物、すなわち「住吉陣営」を京都に移築したとされる。この建物は資材のすべてを土佐から運んで建てたという。それがさらに京都へと運ばれてきたという次第なのである。

コラム・龍馬のこと

縁の不思議

現代龍馬学会会員 鈴木 亮

私は坂本龍馬の銅像が立っている円山公園のすぐ近くにて働いている。また南へ進むと龍馬が宿として使用していた明保野亭や龍馬の墓が建つ霊山護国神社がある。こうして龍馬ゆかりの地に近いところにいるのも偶然ではなく何らかの縁があったのではないかと感じている。

京都は妻であるおりょうさんと出会った地でもあり、龍馬の終焉の地でもある。また様々な出来事があった場所でもあるので第二の故郷とも言えるであろう。

一介の脱藩浪士に過ぎなかった龍馬が勝海舟などの人物との出会いを通して船中八策を思いつき、大政奉還という偉業を成し遂げる。龍馬は短い生涯の中で「縁の不思議」を十分に活用したといえるのではないだろうか。思えば人生は縁の連続であり、縁ある人とはつながりを持ち続けているのである。

私自身故郷を離れ、現在の居住地である滋賀県に住んで10年以上の月日が経った。自転車で5分ほど走れば琵琶湖が一望できる快適な場所に住んでいる。琵琶湖は古事記にもその存在が確認されている由緒正しき湖であり、その近くに縁があったことについては神様に感謝したい気持ちである。

ところで電車もバスもない幕末において、江戸や京都・長崎など様々な地を駆け巡った龍馬の活力は目を見張るものがある。脱藩をして、諸国を放浪することで縁を生かし、幅広い人脈をつないだという生き方に対しては憧れを抱く。

私も可能な限りはあらゆる地を旅して、素晴らしい出会いに巡りあえるように努めていきたい。ちなみにゴールデンウイーク前半は高知市内を旅行し、龍馬生誕の碑などを訪れた。もちろん坂本龍馬記念館にも。

最後に、龍馬が宿として利用していた寺田屋(京都市伏見区)は現在でも宿泊可能です。興味がある人は是非泊まって下さい。

“話してみるかよ”

龍馬がいない！

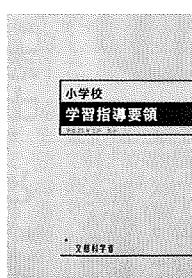
高知市立昭和小学校教頭 川崎 弘佳



小学6年になると社会科では日本の歴史を学習する。内容は文部科学省が告示する「小学校学習指導要領」の中に示されており、それを基に教科書も作られている。具体的には「歴史上の人物が当時の世の中の課題を解決し、人々の願いを実現するために様々な知恵を出し合ったこと」などを学ぶ。歴史を人物中心に学習するため、その指導要領には教えるべき人物42人の例示がある。卑弥呼から野口英世まで政治・文化に関わる人物たちだ。幕末から明治初期では勝、西郷、大久保、木戸、明治天皇、福沢、大隈、板垣、伊藤、陸奥が取り上げられている。

なぜか、坂本龍馬がいない。例示にない人物を学習する時間はあまりないので、日本の多くの小学生は龍馬の存在を知らないのが現状だ。筆者は文部科学省教科調査官になぜ、龍馬が学習する人物に取り上げられていないのかを訊いた。その教科調査官は「龍馬は表の仕事をしていないので、子どもにはわかりにくい。」と率直に話してくれた。建物を造ったり、書物を書いたり、天下統一や明治新政府をつくるなど形あるものや人物の働きが明確なものが教えるのにはよいのだろう。

確かに歴史の実を手にした人物の方がわかりやすい。しかし、坂本龍馬は表舞台には立たなかつたが、薩長同盟を成し遂げ、船中八策を作るなど上記の人物と同様に近代国家への道筋をつくった一人である。また、子どもの発達段階を踏まえたとしても、神童でもないあの泣き虫龍馬が歴史の中で価値ある働きをしたこと、それを学ぶのは未来を託す子どもたちへの最高の勇気づけになるのではなかろうか。



高知県立坂本龍馬記念館
〒781-0262 高知市浦戸城山1830

TEL(088)841-0001 FAX(088)841-0015
<http://ryoma-kinenkan.jp>